

## ■川上元美氏インタビュー調査記録

# 高山と旭川の家具デザイン振興に携わって

[日時] 2021年12月23日(木) 15:00~17:00

[場所] 川上デザインルーム(渋谷区大山町)

[出席] 川上元美氏/青木史郎、黒田宏治

\*川上元美氏:1940年兵庫県に生まれる。66年東京藝術大学美術研究科修士課程修了、66-69年アンジェロ・マンジェロロティ建築設計事務所(ミラノ)勤務を経て、71年川上デザインルーム設立、現在に至る。プロダクトデザイン、インテリアデザイン、環境デザイン等を手がける。東京藝術大学、多摩美術大学、金沢美術工芸大学、神戸芸術工科大学などの客員教授を歴任。各地の地場産業の活性化事業や地方人材育成事業に協力。2013年より公益財団法人日本デザイン振興会会長。



### [目次]

- 高山家具パイロットデザインを振り返る
- 高山家具産地の地域特性
- パイロットデザインの波及効果
- 旭川国際家具デザインコンペのはじまり
- 審査経験を通じての評価とこれから
- 隣接する写真と家具のまち東川町
- 地場産業の経営とデザイン
- インテリアセンター・長原實について

+++++

——川上さんは、1981年に岐阜県高山市の家具産業を対象にした、地方産業デザイン開発推進事業のパイロットデザインに携わっておられます。また、1999年(第4回)から2017年(第10回)にかけて、

国際家具デザインコンペティション旭川(IFDA)の審査員をされています。本日のインタビューでは、それらのご経験を踏まえて、地域のデザイン振興をめぐっているいろいろお聞きしたいと思います。

### ●高山家具パイロットデザインを振り返る

——パイロットデザインに関わりどのような印象を持たれましたか?

椅子・テーブル・ボックスを組み合わせるリビングやダイニングスペースを構成する3つのシリーズのデザイン、試作を行いました。カタログを見ていただけるとわかると思いますが、けっこう費用もかけて、参加各社にもご尽力いただいて、試作したことを覚えています。あちこちから予算を引っ張り出して、当時日本産業デザイン振興会では田中義信さんが担当でしたが、振興会の方からも何らか追加予算を捻り出すなどご苦労をいただきました。

パイロットデザインの成果は製品化には至りませんでした。参加した企業の皆さんはやりたかったみたいだけど、それぞれが遠慮されたようでね。うちはこれをやるとか、どの企業も言い出せず、結局決められなかった。産地全体が共同でデザイン、試作をしてきた経緯がありましたからね。

そしてパイロットデザインの翌年度には、東京・新宿の建ったばかりのNSビルで展示会をやりました。東京市場での反響は大きなものがあり、これは産地に大きなインパクトを残したと思っています。それまでは「木工まつり」という高山の中だけで商品展示会をやっていたわけで、高山にとっては東京での大規模な展示会は初めての経験でした。これを契機に産地企業の間で東京でも発表しようという気運が高まったと言えます(1991年に東京国際家具見本市に有志企業が出展)。

その時点ではまだ各社の開発レベルの差、企業力の差もあったと思います。当時はまだ図面の描けない企業もありました。椅子にしても例えば米国市場向けにバイヤーが持ち込んだサンプルをそのまま製造するようなやり方が一般的でしたから。産地メーカーの方では独自のデザインとか開発とか、あまり考えずに済ん

でいたわけですね。そのような商行為が残っていた時代でしたからね。そう考えると、この事業を境に長足の進歩を遂げたと言うことができると思います。この事業自体が高山地域の企業にとってデザインに取り組むきっかけになったわけですね。

ちょうど市場が多様になってきた時期でもあったと思います。海外から安価で良質な製品も入ってくるようになりましたし、かといって中途半端に高級な家具製品を作っても買ってもらえないし。そんな状況の中で、高山の家具メーカーも新しいマーケット動向の合った開発商品を投入していかなければならないという逼迫した状況になりました。

また、それまでは業界の中でも真似したとか真似してないとかいうこともあったようですが、その頃にはそのような話はあまり聞かなくなりましたね。各社が努力して製品の方向を探っていくとか、そのような対応が求められ、自覚されるようになった時代になりましたから。

1990年代は産地でもデザインに力が入り始めた時期ですね。それで例えばミラノの家具フェア、佐渡川清氏のプロデュースにより、パリ国際家具見本市、ロスアンゼルスウェストウイーク 2001 など海外の家具展示会に出すようになって、そういうところに出すと海外との比較もできるし、家具デザインを見る目もできてきます。当時海外に出すというのは、まずは「市場」よりも「土俵」でしたかね。自治体のバックアップを受けた海外展開だったかもしれませんが、大きな意味はあったと思います。でもその先、補助事業の枠内では流通・販売の作業面の面倒はみてくれないし、結局メーカーが独自にやってくださいと言った方式で、本来そうすべきだとは思いますが、見ていて何か少しでも後押しがあったらと当時は思いましたね。

### ●高山家具産地の地域特性

高山は狭い地域に凝縮したかたちで家具産業が存在しています。中小・零細のたくさん企業がありました。いくつか老舗で規模の大きめの企業があったと思います。飛騨産業（1920年創業）、柏木工（1943年創業）、日進木工（1946年創業）、シラカワ（旧白川製作所、1960年創業）、キタニ（1967年創業）など。あと新しくなりますがオークヴィレッジも高山ですね。あそこは木工運動的な住宅や家具づくりと、職人教育にも熱心で、曲げ木の技術をもった優秀な人材も排出するなど高山でもユニークです。

高山の家具産地はそんな具合で、どれか一社が突出するようなかたちではなく、謂わば群雄割拠のような状況です。そう考えると、同じようなレベルで競っている地場企業が多い産地というのはあんまりないかも

しれませんね。後でお話しする旭川では、カンディハウスがどんと一社だけ突出してある感じですから。

一番の老舗は飛騨産業になりますか。去年だったか設立から100周年を迎えています。この会社は古いだけでなく、ここから分かれた企業もあるようで、人材はずいぶん流れていると思います。曲げ木の技術を開発して、トネット椅子を研究、模倣することなどから創業したと聞きます。技術力もありますね。戦時中は木製戦闘機も作っていたはずですね。戦後には進駐軍向けの、曲げ木主体の家具を一手に扱った時期もあったようです。このあたりが会社を大きく発展できた要因だったのではと思います。

高山は伝統の技術や文化もあり、周囲は森林も豊かな地域です。古くは江戸幕府の直轄地であった飛騨高山地区の山林は御用林でした。あのあたりは、藩主金森可重の長男宗和により茶の湯と共に漆の春慶なんかも育っています。それと高山の町には祭りの山車がありますよね。京都の山鉾と同じです。あれは木工、漆、金工（鍛金、彫金）など伝統工芸の総合芸術ですよ。それを今日まで維持してきているということは、それらの技術が地域に残っているということです。高山の場合、木工家具や工芸は飛騨の匠の伝統に由来しておりますが、ただその伝統に囚われすぎている保守的なところがあるようにも感じました。

### ●パイロットデザインの波及効果

——パイロットデザインは高山の家具産地に何を残したと思いますか？

直接の関連まではわかりませんが、パイロットデザインの後は、いくつかデザイン関係の動きが見られました。高山には1987年に「飛騨国際工芸学園」（1987年～2013年）という木工家具職人養成の専門学校も設立されました。産地企業の間で人材ニーズが高まった結果だと考えられます。1990年には飛騨木工連合会の主催で学生デザインコンペも始まりました。私も当時千葉大教授清水忠男さんと一緒に審査員として携わりました。「飛騨・高山学生デザイン大賞」という名称で、第1回が1990年で、ほぼ2年おきで第10回2007年まで続きました。

また、従来から高山市内で毎年開かれてきた「木工まつり」ですが、衣替えしたのもこの頃だったかなと思います。「木・人・匠のフェスティバル」に名前を変えて、大々的な展示会イベントに変わりました。1991年が第1回、新作家具展示会である木工まつりに飛騨クラフト展、飛騨のちびっこ版画展等が併催というかたちになり、参加者の幅も広がり賑やかになりました。

近年では JDN（ジャパンデザインネット）と組んで、2017 年から製品化を目指す飛驒の家具アワード・家具デザインコンテストを毎年開催し、現在コロナ禍のために中断してしまいましたが、高山の知名度が上がってきているという背景もあり、広報などインターネットの利用により余り経費をかけないで応募は急速に増えていました。昔は国際コンペというと人海戦術で大変だったけど、最近ではインターネットでの広報で、世界中から応募がたくさん来るようになってきました。時代も変わってきたなと思います。

それから、1981 年の地方産業デザイン開発推進事業のパイロットデザインでは、参加企業の中に産地という意識が芽生えたと言われれば、そういう効果もあったのではと思います。同事業は 3 ステップの構成で、1980 年には事業の一環で産地振興体制（飛驒木工産業研究会）が整備され、パイロットデザインそして翌年度の流通対策事業では、高山木工家具産地として事業に取り組み広報をしましたから。高山の家具産業の足取りに関しては、飛驒木工連合会 50 周年記念誌『飛驒から世界へ』をご覧になると参考になると思います。

私は、81 年のパイロットデザインへの参加の直後は、まだ高山でデザイナーとして本格的な仕事はやってないですね。パイロットデザインからしばらく時間をおいた 1987 年から 2007 年に、先述した学生デザインコンペの審査を通して当地の状況を把握。本格的に高山の企業と家具デザインの仕事をやり始めたのはその後からになります。

いくつか高山での仕事を紹介いたします。飛驒産業の関係の主なデザイン作品は、2011 年のダイニングチェア・テーブルセットの〈SEOTO〉シリーズ（翌年ダイニングチェアがグッドデザイン・ベスト 100 に選定）、2014 年の杉材圧縮榫目技術を用いた〈KISARAGI〉ダイニングチェア（グッドデザイン金賞）、一昨年には飛驒産業創立 100 周年を記念した SEOTO-EX100 などがあります。また、2008 年に、日本デザインコミッティーメンバーの活動としての家具の開発で、私は日進木工と靴べら付きスツール〈STEP STEP〉や、「椀一式」使う漆器へ、「重と箱」というテーマで飛驒春慶の新しい日用品などをデザインしました。パイロットデザインとの関係で考えると、各社の世代交代の後にデザインの仕事に結びついた感じです。

## ●旭川国際家具デザインコンペのはじまり

—— 1981 年に飛驒高山に入られて、これは先生にとって初めて地場産業との関わりだったと思います。旭川とはいつぐらいからのご縁になるのですか？

実は旭川とも同じような時期にご縁は始まりました。旭川にはインテリアセンター（現カンディハウス、以下カンディハウスと記す。）に OEM を頼みに行ったのが最初でした。愛知県にホウトク（本社、小牧市）という家具メーカーがありまして、そこがオフィス向けの木製高級家具を作りたいと相談があり、それで役員と一緒に頼みに行ったのが最初、1979 年です。その後カンディハウスからもコントラクトに向けたデザイン商品の要望があり、モノド・シリーズを提供したことからお付き合いが始まりました。

それから 10 年くらいたってからですね、旭川で国際家具デザインコンペが始まったのは、1990 年が第 1 回ですから。旭川では工芸、デザイン教育がさかんだったのも背景にあったと思います。伊勢丹研究所の所長であった鈴木庄吾さんが旭川市にあった北海道東海大学芸術工学部に招聘されて、デザイン実績も高くまた教育者でもあったところからから、謂わば産学官が関係するなかで地元の木工産業界が盛り上がり、旭川開基百年記念事業のひとつとしてこの年「国際家具デザインフェア旭川'90」を冠したコンペが開催されました。木材の主要生産地であり、デザイン都市宣言を見据えた旭川で、故長原實コンペ開催委員会会長の強力な推進力のもと地元や各機関の卓見と周到な準備のもとに育まれて行きました。

あの時代の北海道はまだ景気がよかったというか、今思えばバブル景気の崩壊前で家具産業関係にも潤沢な資金が回っていたようです、もちろん業界、行政の担当者の努力もありましたが、コンペのプロモーションのためにキャラバンを組んで、ミラノやサンフランシスコの家具展示会のオープニングに出掛けて行きました。ミラノでは高級ホテルに会場を設けて、サンフランシスコではカンディハウスはじめ旭川の家具メーカー有志でショップを出していたこともあって、大々的な広報活動が行われました。

第 1 回から審査委員は海外からも招聘して、A. ヌルミスニエミ（フィンランド）、J.D. パス（イタリア）、M. マッコイ（アメリカ）の 3 氏、日本からは宮脇檀、喜多俊之の 2 氏でスタートしました。審査委員長は建築家の宮脇檀が担当しました。当時私は審査委員はしていませんが、J.D. パス氏の招聘に、ミラノの事務所へ私が頼みに行ったことを覚えています。初回から国際的にもしっかりした審査体制だったと思います。

## ●審査経験を通じての評価とこれから

私は第 4 回（1999 年）から審査委員を務めました。これは国際コンペとしてしっかりした事業だったと評価できます。コンセプチュアルなアイデアだけに終わ

らせるのではなく、旭川の業界で試作、製品化に取り組むことを前提に、産業として結果を出すような仕組みを備えていたことがユニークなところ。実際には難しいところもあり、最終審査で、理屈を超えたイノベティブな要素と実用的要素の強い両極の作品が拮抗し、ゴールドリーフ賞を選びきれずに両方向から各一点を選んだこともありました。

また2次審査に向けた応募作品の試作は旭川の家具業界の技術を駆使して製作されることも特徴で、その高い技術レベルも称賛されていきました。そして10回を振り返ると、商品になっているものもけっこうありますね。これはコンペの功績として大きい。世界中から幅広いアイデアやデザインが寄せられ、それはメーカーにとって研究の手段にもなり、大変刺激にもなったようです。

思い出すのはデジタル技術の3D・CADの一般化が始まったころ、まだソフトが未熟だったせいだと思いますが、同じような表現を伴ったデザインの応募が散見されました。同じような木目の表現や、現実には成り立たないデザインも見かけました。それから考えると最近ソフトも進化して、作品の幅やデザインの精度も上がってきており、旭川のコンペは海外でけっこう高い評価を得ています。こういう種類のコンペはほかにはないようです。応募作品が商品化につながるコンペというのは珍しいです。コンセプト的なアイデア優先のものは根拠なく造型化することはできませんが、商品化となるとそう単純ではありません。応募側の力量も問われますし、産地側の体制や技術力も必要になります。若手デザイナーにとっては入賞できれば実績評価としても大きいですからね。

旭川のコンペも回を重ねて安定してきているのではないのでしょうか。第10回を終えてスタートから30年がたちました。10回が一区切りで、そろそろ少し方向を変える時期だと思いました。審査委員長も建築家の藤本荘介氏が受け継ぎ、コロナ後の時代は変わっていくと思います。テーマも考え直していくとか、変化していく事でしょう。旭川が発展するには、例えば織田憲嗣さんの宝物「膨大な椅子のコレクション」、あれを旭川周縁地区の環境と横に繋げながら、如何に地域全体の文化や産業を革新出来るかということだと思います。

とはいえ一方で、ものづくりの技術や方法はそんなに急には変わらないですね。それに木は長くいろいろなことが試みられてきていますから、新しいこともそんなに急にはできないと思います。椅子やテーブルの骨格は変えずに、隙間を縫うように時代に合わせていけるかどうか。デザインとはそういうものかもしれませんね。絶対価値ではないですから。暮らしや佇まいに

どのような価値観を求めていくかに関わってきます。

## ●隣接する写真と家具のまち東川町

国際家具デザインコンペをはじめ、旭川がデザインで盛り上がった背景には、隣接する東川町や周辺の町々の活動も影響したと思います。特に東川町のまちづくりの活動はいま脚光を浴びています。東川町ははじめ周辺の町にも木工家具工場が立地していますが、ほとんどの会社が表向き旭川地区とされており、各々の家具産地としての知名度はあまりありませんが、工芸工房も集住しているのは有名です。旭川市への平成の大合併が話題になった時期に、東川町ははじめ東神楽町など合併反対を掲げて、今日まで特徴ある暮らしやすい町づくり、地域づくりに取り組んで、多くの若者が移住してきています。

東川町では旭川の家具コンペより以前から、写真のコンペ(東川町フォトコンテスト)がありました。1985年に東川町は写真の町宣言をして、翌86年に始まっています。誰か写真家がいらしたのかな。そうそうたるカメラマンがみんなあそこで賞をとって、コンテストはずっと続いています。それと写真甲子園(全国高等学校写真選手権大会)、これが1994年に始まっています。ここ1~2年はコロナの影響でやや静かではありますが、町の人たちがこぞってボランティアに参加し、澁刺とした街の空気を感じます。

また、2008年に始まった「君の椅子」プロジェクトがあります。毎年異なる建築家やデザイナーが参加して、町の職人が製作した椅子を町内で生まれた子どもに贈る催しです。名前と誕生日を刻んだ子ども用の椅子を、「生まれてきてくれてありがとう、これが君の居場所だよ」と。それがいま全国にも広がっています。これには元北海道副知事の磯田憲一さんという仕掛け人がいらっしやいます。旭川市にとって、隣接してこういうコンペティターがいたというも、何らか影響しているのではと思います。

東川町のそれらの活動については、『東川スタイル』(産学社、2016年)、『東川町ものがたり』(新評論、2016年)などを読まれるといいかもしれません。

## ●地場産業の経営とデザイン

—— 高山や旭川の地場産業を見ていて、経営とデザインの関係というのは、何がきっかけで変わっていくと思いますか？

そうですね、高山の例でもおつきあいを始めて30数年もたつと、各社でオーナーが変わっていき、世代交代ですね、そのあたりでだいぶ変わってきたんじ

やないかなと思うんです。私が高山でデザインの仕事をしようになったのも、パイロットデザインの時代から代替わりしてからですね。昨年飛騨産業で社長交代があり、社長が会長にそして長女が社長に就任しました。日進木工や柏木工、白川木工なども私が高山に行き始めて以来、親、子、孫と三代目が変わって、これからどのような変化が起きていくのか注目したいところですよ。

これからの会社の発展はそこにかかっていると言えると思います。一つにはある意味で産業の国際化ですよ。新しい世代は英語が堪能で国際感覚も持っていますから。それは親世代が時代を見て子世代の教育に気を使ってきたという事でしょう。それとやはり大切なのは、ものづくりの観点、製作現場に精通している事と時を見る目ですね。変革だけであればディレクターの優秀な人を連れてくればできることもありますけど、経営の理念構築の方はそういうふうには代えはきかないですよ。

比較の意味で旭川のカンディハウスの場合を見ると、社長は親・子・孫の直系でないですね、長原實さんは長く社長を務められましたが、世襲ではなく周りから請われて前身の企業を受け継ぎ社長になった人です。長原さんは職人の出身ですが、かなりカリスマ性が強いがリベラルな人で、親方という感じではなかったな。初代長原實社長、2代目渡辺直行社長、3代目藤田哲也社長、そして当代の染谷哲義社長と、世代が替りましたが、役員合議制による近代経営であり、その中に一本筋が通っています。これは地場産業、中小企業のあり方としては稀で、これも旭川の新しさなのかもしれないですね。

## ●インテリアセンター・長原實について

—— 旭川の家具産業というと長原さんが牽引してきたような印象がありますが、実際にはどうなんですか？

確かにそうですね。それに先だって長原さんが育った環境という前哨戦はあるんだけどね。長原さんはもともと旭川の家具職人で、1963年に旭川市の木工青年ドイツ研修制度で派遣されて、向こうで工場現場の体験やデザインを学び家具産業のあまりの環境の違いに目を開かれたようです。帰国後、1968年に家具工房を引き継ぎ、株式会社インテリアセンターを創設されたと聞いています。

ただインテリアセンターの開発商品は地場の流通には乗らず、ずいぶん苦勞されたようです。それで、当時新宿に小田急ハルクがあったでしょう、北欧家具を

扱って話題になった小田急百貨店の別館です、ここが扱ってくれたと伺います。インテリアセンターの家具は北欧風で新鮮であったことから、当時の東京の時流にものり、また輸入物の北欧家具よりは価格もリーズナブルだったこともあり、好評を博したとのこと。そのような状況のなか、長原さん率いるインテリアセンターの発展基盤がつけられたように思います。1970年代から80年代にかけてでしたかね。

それだけ聞くと長原さんが突然出てきたみたいに思われるかもしれませんが、旭川では松倉定雄という方が、長原さんの前の時代に重要な役割を果たしておられます。彼は旭川出身で、富山の工芸学校時代に国井喜太郎さんともつながっていて、仙台の工芸指導所にも在籍されたのかな。その人が1948年に旭川に戻ってきて、長原さんを育ててみたいいな事を聞き及びました。松倉さんとの縁もあって、長原さんは確か東京・下丸子の産業工芸試験場で伝習生として数ヶ月在籍されたこともあるようです。

そういう経緯を読み解いていくと、長原さんも突然出てきたわけではないですよ。ただ経緯はともかくとして、誰か一人突出した才能が現れると、産地が変わるきっかけになると言えるかもしれません。地場産業の産地って、いろいろな脈絡や人間模様があったりして、おもしろく思いますね。

2022.01.16 (文責、黒田宏治)